

通信教育に思う

田 中 篤



佛教大学の門をくぐらせていただいたのは、八年前の五十四年七月、夏期スクーリング開講の日でした。

開講の式辞のなかで、水谷学長より「全国からスクーリングに出席された、学生の皆さん方は、学問の真理を探究するためにおい出になられたので……。」と、言う言葉がありました。そのときは、当然のことのように思いました。よく考えてみると、奥の深い言葉だったと考えさせられます。通信教育を通して学んだことは、数多くありましたが、人と人とのつながり「和」ということが、如何に大切かがよくわかりました。スクーリングに出席するときの職場の上司、同僚の理解を得ること、また、地域父母のあたたかい励まし、スクーリングに出席してから、学友会の支部活動の集会、クラスの学習会、どれ、ひとつとっても、毎日の生活の中で、和合の精神が大切なことを痛感しました。

現在の私のあることも、学友会活動の推進

できたことも、和を尊び、相手を理解する一語に尽きるのではないかと思います。また、スクーリングのことに戻りますが、早朝に登学する楽しみのひとつには、仏教学科の先生方による講話を拝聴することでした。人生の心の糧として、大変よいお話だったと今でも思い出、メモをとったノートを開いて見ることがあります。佛大で学んだ三年・学友会活動で過した四年間、ほんとうに意義のある日々を過ごさせていただきました。よき学友とのめぐり会い、心あたたまることが多くありました。そのひとつとして、終生忘れることのできない日が、日記に記してあります。五十七年二月十一日、卒業論文の面接のため、登学し、村上尚三郎先生より、論文について問われました。そのときの時間がすごく長く感じられました。先生の質問はきびしいなかにもやさしさが感じられ、「面接はこれで終ります。」と、いう言葉を聞いたとき、頭をしめていた、たがが一度にゆるんだような気持ちでした。面接会場を出ると、スクーリングのとき、お世話をいただいた、京都在住の森口さんが、私に声をかけられているのが、どこか遠くから聞こえてくるように感じ

られました。

彼の車にのり、大原に向かいました。二月の雪にうつらうつらつまった大原は、実に静寂で美しい雪景色のなかを三千院に向かい、三千草弁当で祝福していただいたと日記に記されています。

彼も結婚し、一児の父親として仕事に一層、精を出して勤務しているとの手紙をいただき、我がことのようにうれしく思います。

現在は、テレビドラマで放映された「北の国から」の舞台になった、富良野市の小さな小学校の教師として勤務しています。

緑につつまれた、美しい環境の中にある学校、その一日のはじまりは、何んのためらいもない元氣な子どもたちの「おはよう。」の挨拶からはじまります。子どもと共にある今の生活が、ほんとうに充実しています。

この子どもたちに願うことは、ただひとつ、思いやりのある、人の痛みを感じることのできる子どもになることを日々に願いつつ勤務している今日このごろです。

(昭和五十七年前期通信教育部社会福祉学科卒。鷹陵同窓会理事 北海道富良野市立鳥沼小学校教諭)